

『糖尿病に対する問題意識形成の諸相』

-インドネシア共和国における糖尿病を事例として-

平成 21 年入学

参加したフィールドスクール：カメルーンフィールドスクール

調査地（調査国）：インドネシア共和国

阿瀬川 慧

キーワード：糖尿病、医療保障、医療政策、地域医療、生活習慣病

1, 自分の研究テーマについて

糖尿病はもはや先進諸国のみの病ではなく、開発途上国においても急増している。WHO の調査を基にした、インドネシア保健省(以下 DKRI)の発表によると、インドネシアは中国、インド、米国に次いで 4 番目に多い糖尿病患者を擁している。罹患率は全人口の 8.6%に及び、1995 年の 450 万人から 2025 年までに 1240 万人に増加すると推測されている[WHO,DKRI 2005]。それ故、糖尿病は国家レベルでも重要な課題となりつつあるのではないだろうか。こうしたことから、そもそも糖尿病がインドネシアにおいてどのように病として社会的に認知されるようになったのか、そして、国家はどのような対策を取ってきたのだろうか。

1986年7月1日、糖尿病に対する問題意識から国家主導でインドネシア糖尿病協会（以下PERSADIA）が発足し、これまでに11地域、92支局、172団体が創られた[DKRI]。しかし、情報収集整備体制が整っておらず、地域支局が独自の対策や調査を行っており、国家として有効な糖尿病対策が打ち出せないでいる[Jakarta Post 2003]。また、2006年に'Unite for Diabetes'が国連採択されたことにより、国際的に糖尿病対策の必要性が課題となり、インドネシアでも主要都市を中心に糖尿病患者自らが地域社会に対して、糖尿病についての啓蒙運動を活発化し始めているのである。

2, フィールドスクールから得られた知見について

今回、カメルーンフィールドスクールに参加したことは、「フィールドに出る」ということを深く考える、好機となった。これまで、フィールドに出るということを、私は曖昧なイメージで描けていなかったからである。

カメルーンフィールドスクールは 20 名を超える大所帯であった。それ故、今回のフィールドスクールのように、ひとりひとりのバックグラウンドや研究関心が違う中で、全員が満足のいくまで、訪問地や自然生態などの調査対象を視ることができた訳ではないように思う。

今回のフィールドスクール期間中、限られた時間や範囲の中で、自分の研究関心にどのように結びつ

けることが可能なのか、またそれをどのようにアウトプットすることができるのかということを中心に考えさせられた。今後、自分自身の研究テーマのみでフィールド調査を行う際、単独での調査が中心となることが予想される。その際、今回のフィールドスクールで得ることのできた知見を、今後の自分自身の研究に活かしていくことは勿論のこと、他専攻の研究者との研究を行うに至る際にも、重要な視点となるように思う。

3. フィールドスクールで学んだことがどのように研究テーマにいかせるか？

私の調査地はインドネシアであり、今回のフィールドスクールの開催地である、カメルーンをはじめ、他のアフリカ諸国に対しても目を向けたことがなかった。しかし、フィールドスクール参加が決定した後、アフリカにおける糖尿病について調べ始めた。

インドネシアは数百に上る民族が暮らす、多民族国家である。それ故、医療問題に関しても一筋縄には解決に導くことはできない。糖尿病に限って言えば、各民族や島によって、文化背景も違う中で、予防をはじめ、食事療法などひとつの対策では対応しきれないのは明確なのである。これと同じことが、アフリカにおいても言えるのではないだろうか。

フィールドスクールが行われたカメルーンを例にとると、カメルーンはアフリカの縮図と言われるほど、東西南北で気候に変化が見られるという。またそれに伴い、民族も 200 を超える。こうした事実は、世界各地で爆発的な増加を続ける糖尿病が抱える問題を解決に導くにあたり、他国間の共通点を基に、比較研究といった手法を用い、対象となる地により根ざした医療政策・対策の提言ができるのではないかと、考えている。



↑ DjaReserve へ向かう途中の Ayos という街にて。物売りの少女たち。



↑ Dja 川を渡る際、ワイヤーを用いた筏による渡し船。4 駆 2 台ずつで片道約 20 分！



← Dja Reserve へ向かう途中立ち寄った、村にて。バカピグミーの少年。